

日 本には「姨捨伝説」が物語や小説の形で残されている。古くは平安時代の『大和物語』に、現代人に知られるものとしては、明治時代に発表された柳田國男の『遠野物語』に記述が見られる。

深沢七郎が姨捨伝説を題材にした小説『楢山節考』は、著名な監督によって映画化された。1958年の木下恵介監督、83年には今村昌平監督がリメイクした。姨捨の風習が実際にあったかどうかはともかく、日本が貧しかった遠い過去において、高齢者を介護する厳しさを物語る逸話である。

◆家族が24時間介護する

近代以降、日本人の生活は豊かになっていく。その豊かさは平均寿命を延ばし、高齢者を増加させた。当時は三世代が同居する大家族での生活が中心だったため、介護が必要となった高齢者は、一全員で面倒を見る風潮があった。戦後、その風潮は高度成長を契

そんな日々が二年間続いた。文京区のマンションを人に貸し、末娘が住む稲毛の近くにマンションを借りて移り住んだ。娘の協力は得られたが、24時間介護に向き合うことに変わりはなかった。

◆これからの介護の理想形

たま江さんの体力は限界に近づいていた。そんなとき、新七さんを担当するケアマネージャーから

老老介護の時代、介護の大きな負担を少しでも軽減できる環境作り



介護に優しいまちづくり 千葉・グリーンプラザ園生 (2005年・平成17年)

変わる日本の「暮らし」と「まち」



新田匡史
につた・まさお

illustration: Shigeyuki Sakata

機に変化していく。若い世代は仕事を求めて都市に流入、核家族化が急激に進んだ。寿命が延びた高齢者と同居する家族の数は少なくなり、一家総出の高齢者介護が物理的に不可能になった。

それでも、60年時点での高齢者と子どもの同居率は9割に迫る数字(厚生白書・平成元年版)だ。現実的には世間体を気にして同居するケースもあつただろうが、年

老いた親の扶養を「子どもとして当たり前前の義務」と考える子どもたちは依然として多数を占めた。ただし、親と同居したのは長男夫婦というケースが多かった。実

質的に親の介護を担ったのは「長男の嫁」だった。現在ほど介護サービスが充実していない時代、彼女たちは必死になって夫の親を介護した。しかし、時が経つにつれてこの風潮も変化を見せる。

核家族化はさらに進み、ライフスタイルの変化や経済的理由、さらには同居に対する親子双方の意識の変化などから、高齢者と子ど

もの同居率は低下する。一方で日本人の高齢化は急速に進み、現在では高齢者だけの世帯が増えている。高齢者の介護は、今や「老老介護」の時代に入った。三年ほど前まで、白井たま江さん(69)は文京区のマンションで夫の新七さん(78)と二人で暮らしていた。三人の子どもを育て上げ、新七さんの定年退職後は二人でよく旅行に行つたという。

「こんなに幸せでいいのかと思えるほど、充実した生活でした」三年前、新七さんが脳梗塞で倒れた。介護が必要となり、楽しかった生活は一変する。「私がひとりで支えるしかない」

たま江さんは覚悟を決めた。だが、自宅での介護は24時間気休まることがなかった。昼夜を問わず、夫に呼ばれば飛んでいかなければならない。ヘルパーに夫の介護を頼み、買い物など所用を済ませることはできたが、自由になる時間は一時間あまり。夫の介護は頭から離れなかった。

食を新七さんとともにする。就寝の仕度をすべて終える午後8時までは積極的に介護に関わる。しかし、その後は24時間の見守り体制のおかげで、安心して自宅に帰れるのだ。たま江さんは24時間介護に向き合うことから解放され、元

気を取り戻した。最近では、介護のために棄ててきた趣味の時間をひとつずつ取り戻している。生活クラブ風の村いなげの施設長、日下直人さんはこう話す。「団地の方や周辺に住む方に介護が必要となったとき、あそこに連絡すれば何とかしてくれると思われ存在になりたいのです」

たま江さんは「この環境に満足しています」と語る。かつては頑なにデイサービスに行くことを拒んでいた新七さんも、今では積極的に行くようになったんです。たま江さんは笑った。

情報もたらされる。稲毛のグリーンプラザ園生の隣接地に「生活クラブいなげビレッジ虹と風」という施設ができるというのだ。URは、旧園生団地(現グリーンプラザ園生)の建替えによって生まれた敷地で、団地住民や周辺住民も利用可能な施設を整備する事業者を公募。その際「高齢者福祉施設及び当該施設に関連する施設」という条件を出した。選定されたのは、生協を母体とする社会福祉法人生活クラブ。彼らはURをオプザバーとし、団地住民や周辺住民と何度も意見交換を重ねたという。2011年7月、利用者の要望を反映させた施設が完成した。

福祉棟「風の村いなげ」は、スタッフが365日24時間常駐して入居者を見守るサービス付き高齢者向け住宅を核とする。ショートステイやデイサービスセンター、診療所も整備された。隣にある生活棟「虹の街いなげ」には、周辺住民の声が最も大きかった小売店